

ある脳卒中者が経験した作業の変化～指向性～

小田原悦子¹⁾, 辻 郁²⁾

1) 聖隷クリストファー大学, 2) 大阪保健医療大学

要旨：身体障害でおこったライフクライシスの作業を理解するために、脳卒中女性をインタビューし、その経験を現象学的に分析した。脳卒中後、彼女の作業は変化し、operational intentionality（操作的志向性：自動的に起こる動作）と intentionality of action（行動の指向性：目標にむかって時間的経過の中でおこる活動）は滞った。徐々に作業に従事することによって新生活構築への可能性に気づき、行動の指向性が回復し、さらなる従事で新生活の構築がすすむにつれて、指向性はさらに回復するという変化があることがわかった。さらに、倫理的責任（他者の存在によって行動が影響されること）が、脳卒中後のライフクライシスにおける指向性を刺激することが指摘された。

キーワード：作業従事, 現象学, 可能性, 気づき

はじめに

臨床現場の作業療法士は、クライアントが病気、障害などで困難になった生活を再構築し、より健康に生活することを目標に援助する。作業科学の研究者は、人の作業の本質、形、機能、個人的あるいは社会的意味を研究することによって臨床の作業療法に貢献する¹⁾。病気、障害により作業はどのように変化するか、変化した作業を個人はどのように経験するのか、その後の新生活構築の経過の中で、作業はどう変化するか、解明して臨床家の役に立てることはその貢献の一つになるだろう。

作業療法・作業科学の研究者は、障害による作業の変化をとらえるために役立つ視点を提示してきた。日常生活上の機能の変化としてとらえる作業パフォーマンスの視点^{2,4)}、個人が経験する、障害前と障害後の作業従事のギャップを作業経験の視点で捉えた研究^{5,6)}、障害後の状況にどのように適応するのか、その戦略を明らかにした研究^{7,8)}がある。さらに、障害による作業従事がどのように変化したかを探索した研究では⁹⁻¹¹⁾、作業に従事し、新生活を構築することによって、クライシスを解決することが可能であることが指摘された。しかし、ライフクライシスの経過における、作業従事の変化については明らかにされていない。

本研究では、ある脳卒中後遺症者の経験から、障害によってもたらされたライフクライシスにおいて作業がどのように変化し、その変化はどのように経験されるのかを、ライフクライシスの視点と現象学的活動の

見方を使って分析する。

ライフクライシスの理論：van Genneep は、人々が、人生の節目で社会的地位を移行してゆくために取り行われる通過儀礼（例えば、青年が成人になる儀式、結婚式、葬式など）を、実際のライフコースを象徴する現象として捉え、そのライフクライシスの内容を分析し、ライフクライシスの経過中に、個人と社会との関係、及び個人の意識状態に変化がみられること、経過が進行するに従って、分離・移行・再統合の各段階があること、そして、この順序で経過すると指摘した¹²⁾。

van Genneep の各段階の特徴は、分離：クライシスに陥った人は、まず社会から離れる、移行：社会におけるその人の存在、役割は失われ、新しい存在に替わる、再統合：新しい存在に必要な作業を獲得し、新しい役割として社会に帰る、とした。新成人を例として述べると、各段階の内容には、van Genneep によれば、地域集落から辺鄙な所に連れ去られ（分離の段階）、子供としての社会的地位を失い、成人という新しい地位を与えられ（移行の段階）、その役割に必要な活動を習得し、新成人として社会に戻り新しい地位につく（再統合の段階）、が含まれる。

現象学的「人間の活動」の理解：現象学者は、人間の意識と対象の性質を理解するために、信頼性のある論理的方法を目指して研究した¹²⁾。そのユニークな点は、人間は、身体を世界に開き、知覚を通して世界と交流し、そこから経験したものに基づいて対象（世界）を知るととらえる Husserl からの姿勢であり、作業に

従事する人の視点からその経験を理解しようとするものである^{14,15)}。現象学の視点は、作業が従事する人にとって何を意味するかを理解することを可能にする点で、作業科学にとって有益である^{16,17)}。

現象学は、人間は世界（にある対象）を知覚して、働きかけ、知覚を介して世界（対象）を経験し交流しているにとらえる。そのような、我々が世界に向ける意識の性質を指向性¹⁸⁾という。人間が世界に向ける指向性には、運動の指向性の他に、情緒的、性的、言語的指向性があると Merleau-Ponty は指摘する¹⁹⁾。本研究では活動にかかわる指向性に焦点をあてる。

人間の活動にかかわる指向性には、Merleau-Ponty の提唱した「操作的指向性」と Schutz の提唱した「行動の指向性」という異なる2つのレベルの指向性があると言われる²⁰⁾。操作的指向性：われわれが、日常生活の中でほとんど意識せずに自動的、習慣的に行う運動に、常に向けられている指向性である。つまり、行為者である我々は滞りなく活動できることを当たり前として、身体を動かしながら、世界(対象)と交流して、日常の活動を行なっている。例えば、ドアを開けて、部屋から廊下に出る時、我々は、自分の背中や肩や腕の動きにはっきりとは、意識を払っていないが、ドアにぶつからずに通過する。また、自転車を操作している時に、腕、脚の動きを考えずとも我々の身体は自転車を操作する。特に意識せず、バランスをとり、膝、大腿、股関節にどのくらい力を入れるか、抜くか、身体が知っている。意識せずに身体を介して、対象の自転車を操作している。操作している時、明確に意図して身体の各部分を動かしているわけではない。これらの活動は計画、企画なしに自動的、習慣的に行われている。突然、転びそうになって、初めてハンドルを握る手や、地面を踏ん張る足を、意識する。ページをめくるときも、手首や肘をどのくらい曲げて、各指の関節を何度曲げて、どのくらいの力で紙をつまんで、右にひいて、めくろうとは考えていない、それは身体が知っている²¹⁾。我々は、通常、何の問題もなく自動的に行われることを、当たり前のこととして、身体の動きは、気にしていない。

もうひとつは、Schutz が指摘した行動の指向性である²²⁾。われわれが、これから行う行動、活動を通して将来に向ける指向性である。通常、われわれは、何か活動をしようとする時、これから自分がおこなう活動のイメージを描いている。実際にはまだ行っていないが、その未来完了形の行為を想定して、活動を計画して、行動を起こし、遂行する。例えば、セーターを編

もうと思っている時は、すでに、編んでいる自分のイメージがある。あるいは、これからウィンドウショッピングに行く時、我々は細かいことはわからなくて、こうやって何かを探して、ぶらぶら歩き、商品を見ているという、先のイメージを持っている。この指向性には、意図や計画が含まれる。その実行が行動の目的や動機となる。

目的

障害によってもたらされたライフクライシスの中で、作業従事がどのように変化し、個人が作業従事の変化をどのように経験するのかを理解することが本研究の目的である。この目的のために、ある脳卒中後遺症者の作業の変化をライフクライシスの視点と指向性の見方を使って、理解することを目指す。

方法

本研究は、ナラティブ分析の手法を使った、現象学的研究であり、ケーススタディーである。研究協力者ミチ(仮名)は夫と3人の娘がある59歳の主婦であり、脳卒中後遺症者である。7年前の脳卒中発作以来、左半身の麻痺と左無視の障害を持っている。データ収集のため、ミチに個別インタビューを5回施行した。インタビューを半構造的な構成で行い、彼女の生活史、脳卒中以来の出来事、経験したこと、日常の作業について自由に話してもらった。インタビューは録音し、逐語録を作成し、彼女の経験を深く理解するためにナラティブ分析を行った。逐語録を繰り返し読み、起こった出来事を時系列に理解し、ミチの経験した出来事と経験と作業の関係を追った。ミチが頻繁に時間を過ごす運動施設、デイケア、患者会の活動に同行し、6回の参加観察を行い、フィールドノートをつけ、データとした。ミチの経験を理解するための、補的情報収集として、彼女の担当作業療法士に治療経験についてのインタビューを2回行った。データの内容は、本人に確認した。本研究の方法論とデータの解釈について信頼性を確保するために、質的研究を行う作業療法士とピアレビューで解釈について話し合った。本研究の研究計画は聖隷クリストファー大学の倫理委員会の倫理審査で承認された。以下に、ミチの脳卒中後の経験の分析結果を述べる。ミチの経験は、脳卒中によってもたらされたライフクライシスとそこからの解決(回復)と理解された。考察では、ライフクライシスから解決への経過をどのように理解したのかを詳しく述べ、その間の作業の変化を指向性の概念で解釈する。

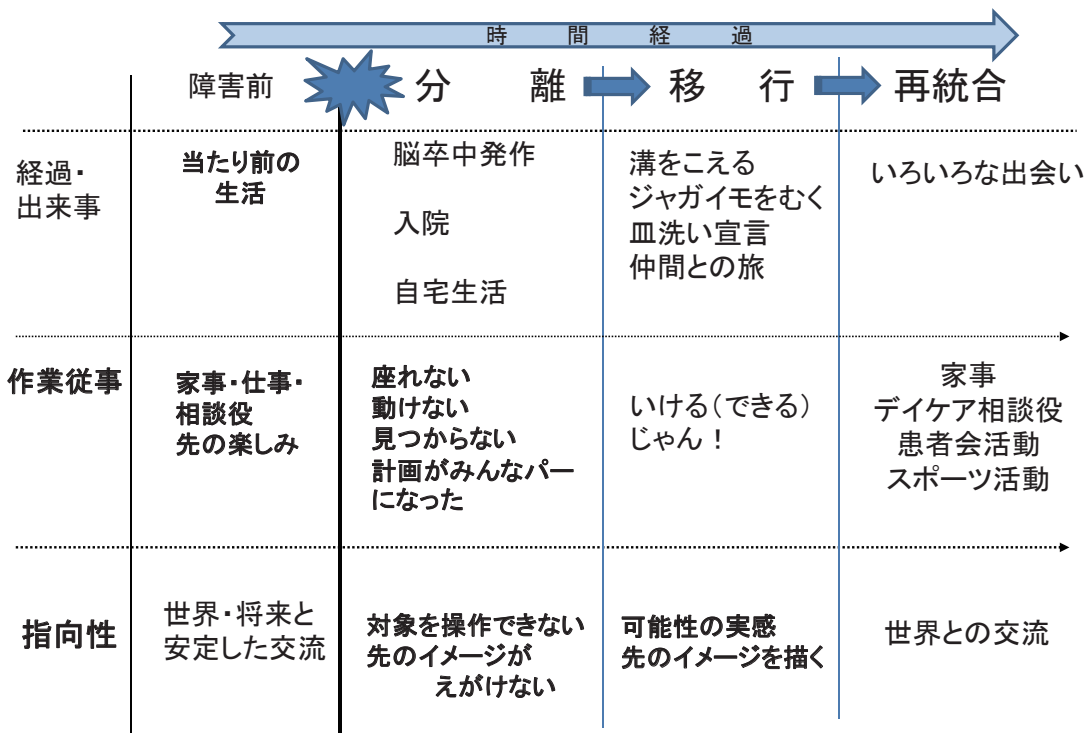


図 ライフクライスの作業の変化

結果

1. ライフクライスの経過の3段階

データのナラティブ分析を行った結果、ミチの脳卒中後の経過は、①それまでの生活から離れ、②ある転機をむかえ、③その後新たに生活を作り始め、家族を含む社会に脳卒中前とは異なる位置で戻るといふ、van Genneep のライフクライシスの3段階：分離、移行、再統合に対応する経過をたどったと理解された。そのため、本論では van Genneep の用語である、分離、移行、再統合を使って、経過を述べる。

2. 作業の質の変化

ライフクライシスを経過するにつれて、ミチの作業従事が質的に変化していたことがわかった。さらに、その変化は、世界に向かう意識（指向性）の変化として理解された（図）。

考察

1. ライフクライシスの経過の3段階

分離：ミチは、病前には、夫と娘3人と生活し、子育て、パートタイムの仕事にがんばり、バレーボールが大好きな、活動的な女性だった。しかし、脳卒中による障害のために、それまで当たり前だった生活が、一遍に大きく損なわれ、何をどうしていいかわからなく

なった。身体が変わって、入院中には、不思議な経験をした。背もたれ付きのベッドに座っていても、身体が傾くのをどう仕様もない状態だった。退院後の自宅生活では、家族が準備した食事を食べ、テレビを眺め、友達と電話で話していた。家族に誘われると、嫌々散歩をしていた。ミチは、退院後の生活についてインタビューで、「何もできないと思っていた... 何もしていなかった。子どもたちが食事はしてくれるから、食事や言われたら... 行くぐらいで、何もしてなかったですね... 外にもあんまり出てなかったですね。引っ込み思案です。」と話した。ミチは、障害前に家族や社会の中で持っていた、「家事」、「娘たちの相談にのる母親」、「パートタイムの清掃の仕事」などの役割を失い、社会からも、それまで築いてきた自分の生活史からも、離れてしまったと考えられる。

移行：自分からは何もせずに、受身的な態度で時間を過ごしていたミチに質的に大きな変化が起こり、その作業は新しい段階へと移行した。ミチは、自宅で何もせず過ごし、出された食事を食べ、誘われれば、断らずに一緒に外出しても、実際には楽しめず、「おいてけぼり」と感じ、何とかしなくてはいけないと思っていた。そんなライフクライシスの中で、いくつかの出来事がきっかけで、「できるじゃん。」という作業の可能性を経験した。例えば、散歩中に溝を越えたことや、

作業療法外来のカレー作りでジャガイモをむいたことが、きっかけ（はずみ）になり、自分から主体的に日常的な作業に従事するようになった。何もできないと思っていたが、できる作業があるという可能性の気づきが、彼女の作業従事を促進したと理解される。この段階は、ミチが、社会から分離した、役割のない状態から、社会に存在する、社会で役割を持つ状態への転換を促し、(まだ明瞭には見えていない)新しい役割に向けて、必要な作業を獲得するように、生き方を転換するという、「移行」の段階であったと理解された。

再統合:弾みがつくように、ミチは家族生活の中で、できないと思っていた作業の中から、自分で探し、試し、あるいは、知り合いに声をかけられたことがきっかけになって、多様な作業に従事するようになった。ミチは、家族生活や地域における異なる場面で作業に従事することによって、社会に参加し、脳卒中以来、失っていた社会との結びつきを回復していった。ミチの作業はモザイクのように組み合わせたり、彼女の新しい生活を構築していった。作業を通してミチが社会の中で新しい役割を獲得した様子を以下に述べる。

ミチは通院先の待合室で、同世代の外来患者に誘われて、脳卒中の患者会に入会していた。健康体操や障害者スポーツに参加し、身体の動かし方を繰り返し練習し、ボッチャーやフライングディスク(身障者スポーツ)の技を磨いた。練習後のお茶会では、患者会の先輩たちから話を聞くのが楽しみだった。動きの練習に夢中になり、自宅で話しているときにも、ミチは、突然新しい動きを目の前でやって見せては娘や夫を驚かせた。

会員として体操やゲームに参加するうちに、体育係のマネージャーとして、他の身障者グループとの試合の調整を引き受けるようになり、障害者スポーツ大会に代表選手として出場した。

外来作業療法がきっかけとなり調理に従事するようになったミチは、自分でも日常生活で使用する道具ややり方を工夫し、実践を重ね、調理の技術とレパトリーを広げ、おいしい料理で、自分も周囲の人々も楽しませるようになった。発作後中断していた季節の佃煮作りを再開し、知り合いに贈って喜ばれている。自分の料理の可能性に気づいたミチは、徐々に家族のために料理を引き受けるようになった。ミチは娘の結婚を祝うために、ウェディングドレスのアクセサリーを作り、引き出物にするために佃煮を作った。

病前には経験したこともなかった卓球、水泳を他の人たちと楽しむようになった。知り合いに卓球を勧め

られると、担当の作業療法士が転倒の危険性を心配しても、卓球を始めたいと説得し、ついに近所の体育館に家族と通うようになった。腹を卓球台に押しつけて身体を安定させて、向かって来る球を追って楽しんだ。

通所者として通うデイケアでは、自分が積み重ねてきた日常生活の工夫や技術を他の参加者に指導し、新しく障害を持った人の相談役を果たし、スタッフを相手に、デイケアの活動プログラムの立案や運営のためにアドバイスを引き受けている。ミチはいろいろな作業に従事しては、その役割を獲得したと理解される。

van Genepによれば、ライフクライシスにある人は、離れていた社会に戻り、それまでと異なる新しい役割につくために、その役割を遂行するために必要な作業(のスキル)を、この再統合の段階で習得する。ミチが、作業に従事し必要なスキルを習得し、患者会の体育担当マネージャー、家事担当者、結婚する娘の母親、スポーツ愛好家の複数の役割に新たについて、社会に復帰した経過は、van Genepのライフクライシス理論と対応すると考えられた。

2. 作業の質の変化

脳卒中に遭って、ミチの日常生活は全く変わった。障害前は当たり前に行っていた日々の作業ができなくなり、家庭や地域での役割、社会との交流の大部分を喪失した。しかし、いくつかの出来事が転機となり、可能性に気づき、いろいろなことに挑戦し、作業に従事するようになり、スキルを身につけ、社会の中で新しく役割を身につけ、家族をはじめとする社会に復帰した。このライフクライシスの分離から解決(新生活の構築)への過程で、作業がどのように変化していったか、ミチは作業をどのように経験していたか、を理解するために、ここでは、指向性を見方を使う。

脳卒中の前:ミチは、家族と5人で生活し、活発な主婦であり、パートタイム労働者だった。活動的に日常の作業に従事することは、当たり前のことであり、彼女は、生活を楽しんでいた。ミチは、調理、洗濯の家事仕事、娘の相談役、パート勤務の掃除、新聞配達、自動車の運転、ママさんバレーなどの日常の活動に従事し、もうじきやってくる娘の成人式の準備を楽しみに計画して生活していた。

脳卒中がもたらしたライフクライシスにおいて、ミチが日常の作業をどのように経験し、作業がどのように変化したのかを理解するために、活動に関わる2つのレベルの指向性(操作的指向性と行動の指向性)に

ついて検討する。

分離：脳卒中後、入院、及び退院後自宅生活の時期
1) “不思議な”経験：ミチは、入院中に身体が麻痺し、左側を無視していた時の経験を、インタビューで振り返って次のように話した。

何が何かさっぱりわからないじゃないですか。自分でもわからないし。で、入院してても、前の方たちはベッドからすつと下りて、トイレもすつと行って、パッと帰ってきて、ベッドにでもすつと上がられるんですよね。「ええ？なんで、すつと上がれんの？私、上がれないのかな？」って、そういう気しかなかったんです。自分でも、リモコンで上げ下げ、あれ（著者注：電動ベッド）があっても私は座ってられなかったんです、全然。食事の時も挙げてもらっていたんです。

食べ物（カレーライス）でもそうやって、テーブルのお盆にのってくると、こっちの左が見えないんですね。ほいたら（そしたら）、自分の好きなもんでも、何でもそうですけど、お隣の方を見ると、いや、果物もついててね、すごいいいな。私ないわと思ったり...

最初のナラティブで、病室で背もたれ付きのベッドに座っているときに、座位バランスを維持できず、身体が傾いた経験と、同室の患者が、ベッドから起き上がり、トイレへ歩いて行くのを見ながら、自分（の身体）はそうならないという、それまでにない経験、不思議な感じを、インタビューで語った。2番目のナラティブも、食事時に配膳された皿の左にあったカレーや果物を見落としていたことに後で気づいたときに感じた不思議な経験だった。

ミチは、脳卒中になる前は、自分でははっきり意図しなくても、身体が自動的な運動で、バランスをとり、手足を動かして室内を移動し、視覚でとらえたリングに手を伸ばしていた。つまり、操作的指向性を通して、対象に対応して、世界と交流していた。それは当たり前のことだった。しかし、脳卒中後は、この自動的運動として世界に向かっていった操作的指向性が世界に向かって行かないことに、ミチは不思議な経験したと理解される。

2) 消えた将来の作業

脳卒中になる前、ミチは、近い将来に娘の成人式の準備をすることを楽しみにしていた。娘のために着物

の生地や帯を選び、自分が娘に着つけるのを楽しみにしていた。我々は、日々の生活の中で、将来に自分がする作業のイメージを描きながら生きている。障害前は、ミチは行動の指向性を通して将来と交流していたはずだが、障害後、彼女の将来の作業のイメージは、どうなったのだろうか？ミチはインタビューで、脳卒中後の経験を次のように話した。

今まで子育てやってたのが、やっとな、手離れて、やっとなこれからやなって、いう時だったからね....
子どもが3人いるんですよ、娘ばかり、.... あの時（脳卒中になった時）一番下の子が高校3年生でしたから、成人式の時、こないしたろうとか、考えたところあるじゃないですか、と思ったのが、全部ことごとくパーになって、してやられへんし。

ミチは脳卒中前には、これから実行するいろいろな作業のイメージを描いて、生活していたが、脳卒中後には、すべて喪失する経験をしたと考えられる。近い将来、娘のために成人式の着物を選び、着つけることを、当たり前のこととして、思い描いてきた。このナラティブで述べられたのは、その行動のイメージが描けないという経験だったと理解される。つまり、(世界の一部である)将来と交流する行動の指向性が滞って、将来に自分のイメージを描くことができなくなった経験だったと理解される。将来に橋がかけられない、希望が持てない経験と考える。ミチは、自宅に帰ったあとの生活については、次のように話した。

そんなに早く起きてませんでしたね。ほんまにブラブラブラブラしてましたね、何にもしないし。
—ご飯ができたらご飯を食べて？

そう。ほんで、ゆっくりで後はもうテレビなんか見る。子どもたちがちょっと今日はお天気いいから、ちょっと散歩に行こうとか、.....
—それは、娘さんが、「行こうよ」みたいな感じですかね。

そうですね。子どもとか、主人とかが連れていってくれましたね。（自分から）行こうというのは全然なかったですね。

このナラティブから、退院後の生活で、ミチは、出された食べ物を食べ、散歩や買い物に誘われたら、嫌々ついて行ったことがわかる。脳卒中以前には、同じ買物をするときにも、ミチは自分が買い物しているイ

メージを持ってその活動に従事したはずだが、嫌々行動しているこの時は、先に何かをしようと、イメージを描いて活動に従事していたのではなかったと理解された。世界へ向かう行動の指向性が滞った状態だと考えられた。さらに、彼女は、このような買い物の経験を「家族は楽しんでいて、(自分の経験としては)置いてけぼり」と、表現した。彼女の主体性の欠如とともに、(家族とともに行動しているにも関わらず)社会的交流の欠如を経験したと理解される。

移行：自宅生活、外来作業療法、患者会活動の経験出された食事を食べ、TVを見てぶらぶら過ごし、誘われれば嫌々散歩に出るという、受身な態度で生活していたミチに、大きなターニングポイントがやってきた。いくつかの出来事が質的な変化を彼女の生活態度にもたらしたことが、これから出てくる彼女のナラティブから明らかになる。これがきっかけになり、ミチは様々な作業に従事し、新しい生活を構築し始めた。ミチを移行へ導いたいくつかの出来事と質的变化について述べる。

出来事① 溝を越える：ミチは、あるとき、いつものように家族に誘われて散歩にいった。事前には予想していなかったが、溝を越えた時のことを次のように話した。

「あ、いけるじゃん」って。「ああ、こんなのできるんか」と思うようになってくる。洗濯物を(家族に)隠れてしよう(取り込もう)とするんですよ。

実際に溝を越えた経験から、これまでなかった可能性に気づいたことがわかる。さらに、家族に隠れて洗濯物を取り込むという日常の作業へと動機づけられたことが理解される。この気づきから、将来の生活の中で、歩いて活動する自分のイメージを持つようになったと理解される。病前当たり前だったが、一度失っていた作業の可能性が彼女の中に再び生まれた瞬間であり、将来との交流が可能になった経験であると考えられた。そして、脳卒中の発作以来、ミチが喪失していた行動の指向性が回復し始めた瞬間であるとも考えられる。溝を越えたという可能性の気づきは、ミチに自動的な歩行という運動を日常の中で繰り返し実行するように促し、いろいろな作業に従事して、将来との橋渡し、社会との橋渡しという意味ある作業の機能を実現していったと考えられる。

出来事② 皿洗い宣言：ミチは家族との生活に戻ったが、依然のように、夫や娘に頼りにされたり、相談を受けることはなく、一緒に買い物に行っても、「置いてけぼり」と感じていたとインタビューで話していた。そのような日常の状況で、ミチは夕食後に皿洗いを始めると宣言したことを話した。

(夕方、家族は)疲れて帰ってきて、(私は)何にもできない。じっとして家にいる・・・少しでも、何か、食事の用意でもしとったら、ちょっとは楽かなあと思ったんですよ。何もできないけど、「後片付けだけでも私がするわ」、ということで(夕食後の皿洗いを)し出したんです。

仕事から帰った家族の疲れた表情が、ミチを、家族のために、皿洗いをしようと動機づかせたことがわかる。家族という(自分以外の)他者の存在が、ミチの行動をはずませたと考えられる。他者の出現や、他者の健康・幸福のためにという動機で、人は刺激され、行動に促されることがあると現象学者の Levinas が指摘した²³⁾が、家族の健康・幸福のために、という動機が、それまで滞っていた彼女の行動の指向性を解放し、ミチを皿洗い宣言に導いたと考えられる。

ミチの夕食後の皿洗いは、休みなく続いた。ミチは毎日夕食後、車いすから立ち上がり1枚の皿を右手で洗い、座ってひと休みし、次の一枚を洗う、を繰り返した。徐々に、立位の耐久性も改善し、一度立つと数枚の皿を洗えるようになった。皿洗いが日課になり、日常生活の自動的な作業に変化する中で、ミチの操作的指向性は日常生活の中で開放されて(回復して)いったと考えられる。

出来事③ 作業療法外来でじゃがいもをむく：ミチは脳卒中発作以降、調理はできないと思い、家族まかせにしていた。つまり、このときミチは、調理する自分のイメージを描けなかったと考えられる。娘が作業療法士に相談し、作業療法外来で初めて調理することになった。ミチの選んだ献立、カレーを作るために、作業療法士がテーブルの上に準備した釘付きまな板と包丁、ジャガイモを目の前にした時の経験を、ミチは以下のように話した。

(カレーを作るためにジャガイモをむくことは)わかっていても、どういう風にしていいかわかんないわけですよ。包丁握ったじゃなくて、どういうふうにし

たらよいか、皮のむき方もわからないし、そうかと言って、釘あれしても、わかんないじゃないですか。……

先生が来て「こんな風に、してはるよ、みんなは。」と。(作業療法士は、目の前で、釘付きまな板にジャガイモを刺し、右手に持った包丁でむいて見せた。)

それで、ああ、そうなんだと、初めて、そこでは、包丁でむいたの。

左手が使えないので、じゃがいもはむけない、料理はできないと思っていたミチは、片手動作でじゃがいもがむけるところを見て、自分で実際にやってみて、その可能性に気づいた。この時のミチの経験を分析すると、いままで知らなかった道具とジャガイモを目の前にして、むき方がわからずに、困っていたが、実際に新しい方法を体験することによって、ああ、そうなんだと、可能性に気づき、自分が調理をするという将来のイメージを持つようになったと理解される。

作業療法外来のじゃがいもむきをきっかけに、ミチは、日常的に料理をするようになった。始めた時は、ピーラーを使った皮むきは不器用なぎこちない動きだったが、後には、「そんなん、ピャピャーですわ。」と彼女が表現するくらいに自動的な動きになり、日常的な調理を可能にした。ミチが、実際に身体を使って対象と交流した経験を通して可能性に気づき、生活の中でその作業従事が繰り返され、習慣的動作になっていったことが理解される。妨げられていた操作的指向性と行動の指向性が解放された経験だったと考えられる。

出来事④ 仲間との旅行

ミチにとって、患者会の集まりや活動に参加することは、どのような経験だったのだろうか。とても意味のある経験だったことが、以下のインタビューからわかる。

ほら、みんな同じ障害者じゃないですか？……自分だけじゃなくて相手もおんなじ身体じゃないですか。だから、相手の気持ちもだいたいこうわかるし。

みんながそういうふうなあれがあるから、なんていうのかな、無茶なことも言わないし。なんかしても、「あ、それで大丈夫だよ。ゆっくりしいや。」と。

言いたいこと言ってもみんながそれを受け止めてくれるじゃないですか。

気を使わなくて済む。みんなね。

患者会の仲間との活動は、彼女に「大丈夫」「ゆっくり」「うけとめられる」、居心地のよい、経験だったと理解される。どうしてそんなに意味のある経験なのだろう？インタビューで、ミチは、患者会の仲間と行くグループ旅行と、健常者相手のツアーに夫と参加した時の経験を対比しながら、行きたいツアーについて話をした。そこには、作業を可能にする経験の秘密、つまり、将来の作業を生み出す可能性が見いだされた。

ほーんとに、元気な人とツアーなんか行ったら、疲れますもんね。

元気な人と、私、ツアー行ったんですよ。やっぱり、普通のツアーじゃないですか。何時までに集まれと言われてたら… みんなに迷惑かけたらいかんというのがあるから… 必死じゃないですか、付いていくのに。迷惑かけたらあかんというのがあるから… 主人も気を使うじゃないですか？

ここ(患者会の旅行)はそうじゃないからね。

ここに対比された、二つの旅の違いは何だろう？一番目に挙げた旅は、自分の動きがそのツアーの速度に合わず、楽しむ余裕もなく、楽しめなかった。もう将来にそのイメージを描けなかった作業だと考えられる。もう一つは、自分の活動のテンポが合っているから、将来のイメージが描ける作業だったから、ミチは、そこに可能性を見つけることができたと考えられた。

ここで問題にされた作業の特徴は、自分の活動のテンポやリズムが、他者のそれと合う経験である。ここでミチが経験した作業は、Csikszentmihalyi が示した、挑戦とスキルが拮抗するフロー(その個人の最大のスキルを使って自分の活動に没頭する)経験ではなく²⁴⁾、スキルに十分な余裕があり、ゆっくりした速度の、社交的な要素も含む作業が表現されている。ミチは、テンポ、リズムを共有できる仲間との作業を経験して、自分が受け入れられ、安心感を味わって、また、旅行に行こうと、将来に旅する自分のイメージを描くことができたと考えられる。

身体を使った作業の経験を通して、可能性に気づいたことがきっかけになり、行動の指向性が将来へと向かい、ミチは先の作業のイメージを描くことができるようになっていったのだろうと考えられる。可能性の気づきによって、弾みがついた作業が、繰り返し従事されることによって、習慣的自動的な動きになっていくことは十分に考えられる。

再統合：いろいろな活動に参加しては、社会的な位置（役割）を獲得しながら、構築した新しい生活に、ミチはどのような意味を持たせているだろう？

元気なころは、まさかと思うような人と、患者会でも、友達もみんなそうじゃないですか、仲間もね、普通元気やったら、すれ違っててもわからない人ばかりじゃないですか。それが、今では、いろんなことわかり合って、知り合って、家族とも仲良くなったりしてる中で、患者会でも、そうですし、スポーツも、まさか、こんなできるなんて思わなかったのが、普通にやってるじゃないですか。

障害がもたらしたクライシスを乗り越え、作業に従事しながら新しい社会的存在になっていった経験を、障害が運んできた人々との出会いと楽しみという意味付けをしたと考えられる。

結語

障害によりライフクライシスに陥った個人の作業の変化を、ライフクライシスの視点と指向性の視点で分析した。その個人と社会との関係の変化と当たり前だった活動（身体を通して、自動的な動きとして世界と交流していた活動）、自分の活動のイメージを通して将来へ交流していた指向性の明らかな変化を見つけた。障害によるライフクライシスにある個人は、二つの活動の指向性が滞って可能性を持ってない経験をすると考えられる。作業を通して新しい生活を構築するためには、ライフクライシスにある人が、「あ、いけるじゃん」と、将来のイメージが浮かんでくるような、作業を探し、提供することが求められる。そのような瞬間のために、その人が世界と交流するために使える自動的な運動、その人の将来の行動として浮かんでくる作業とともに探す努力が求められると考えられる。その作業には、その人の培った生活史、日常の作業の連続性をつなぐ可能性があるかもしれない。

文献

- 1) Clark F. Wood W. Larson E: Occupational science: Occupational therapy's legacy for the 21st century. In Neistadt M E. Crepeau E B (eds), Occupational Therapy, 8th. Lippincott, 13-21, 1998.
- 2) Nelson D: Occupation: Form and performance. Amer J Occup Ther 50: 775-782, 1988.
- 3) Fisher A. Kielhofner G: Mind-brain-body performance subsystem. In Kielhofner G (ed), A model of human occupation: Theory and application. Lippincott, 83-89, 1995.
- 4) Law M. Steinwender S. Leclair L: Occupation, health and well-being. Canadian J Occup Ther 65: 81-91, 1998.
- 5) Clark F: Occupation embedded in a real life: Interweaving occupational science and occupational therapy, Amer J Occup Ther 47: 1067-1078, 1993.
- 6) Eriksson G. Tham K: The meaning of occupational gaps in everyday life in the first year after stroke. OTJR, 30: 184-192, 2010.
- 7) Jackson J: Living a meaningful existence in old age. In Zemke R. Clark F (eds), Occupational science: The evolving discipline. F A Davis, 339-361, 1996.
- 8) Frank G: The concept of adaptation as a foundation for occupational science research. In Zemke R. Clark F (eds), Occupational science: The evolving discipline. F A Davis, 47-56, 1996.
- 9) 小田原悦子: よい老いのためにウチを作る. 作業療法, 27 (4): 394-402, 2008.
- 10) Odawara E: Occupations for resolving life crisis in old age. JOS 17: 14-19, 2010.
- 11) 小田原悦子, 坂上真理: 高齢期の危機と気づき—ユリとハナの新生活構築. 作業療法ジャーナル, 44 (8): 873-878, 2010.
- 12) van Gennep A: The rites of passage. The University of Chicago Press, 1960.
- 13) Barber M: Occupational science and phenomenology: Human activity, narrative and ethical responsibility. JOS 11: 105-114, 2004.
- 14) Merleau-Ponty M: The phenomenology of perception. Humanities, 1962.
- 15) 13)と同誌
- 16) 13)と同誌
- 17) Clark F: Phenomenology and occupational therapy. 作業療法, 21(特): 66-69, 2002.
- 18) 13)と同誌
- 19) 13)と同誌
- 20) 13)と同誌
- 21) Merleau-Ponty M: The phenomenology of perception. Humanities, 1962.

- 22) 13)と同誌
23) 13)と同誌

- 24) Csikszentmihalyi M: Flow: The psychology of optimal experience. Harper & Row, 1990.

Change of occupation experienced by a stroke survivor ~Intentionality~

Etsuko Odawara¹⁾, Iku Tuji²⁾

1) Seirei Christopher University, 2) Osaka Health Science University

To understand occupation in life crisis brought on by physical disability, I interviewed a woman with stroke and conducted a phenomenological analysis of her experience.

After the stroke, her occupations had changed: operational intentionality (automatic behavior) and intentionality of action (action emerging for a purpose across time) were disrupted. Gradual occupational engagement in everyday life prompted awareness of the possibility to establish a new life, and intentionality of action. Through occupational engagement, her new life was established and intentionality increased. Also, ethical responsibility (behavior influenced by the other's existence) was found to promote intentionality in life crisis after stroke.

Key words: occupational engagement, phenomenology, probability, awareness